

## 〔編集後記〕

本年から副委員長として中島編集委員長を補佐させて戴く事になりました。編集委員を4年半務め、本来ならば仕事に精通していなければならない筈ですが実情は大分異なり、副委員長の職務も「校正係」ぐらいにしか理解しておらず、委員長の足手纏いになってしまうのではと心配です。徳永先生（現岡山大学教授）や藤沢先生（肺外科助教授）が副委員長として職務に励んでいらっしゃるのを横目で見ても、何のお手伝いもせず楽をしてきました事を今になって後悔しております。遅蒔きながら、精精努力をして中島委員長の御指導の下に伝統ある千葉医学雑誌の発展に微力を注ぐ所存ですので宜しくお願ひ申し上げます。

さて、前号編集後記で中島委員長が湾岸戦争やバルト三国の紛争危機の余波が教育、学術研究にしわ寄せとなって来る事を危惧されておられました。私は教育、学術研究と言えばその中心は当然大学や大学院にあると無邪気に思い込んでおりましたが、新聞等マスメディアによれば大学の外は勿論「内」でも種々の危機感が囁かれているようであります。それらのニュースが気になり、何とはなしに資料を集めてきましたので今回はそれらを整理してみたいと思います。

タイトルはかなり刺激的であります。「大学の 大改造が将来の日本発展の鍵」（日経メディカル）、「これでは大学が枯れてしまう」（読売新聞）、「大学院は先ず質の充実から」（読売新聞）、「大学の研究機関を独創性生む体制に」（朝日新聞）、「試練の時代を迎える大学」（読売新聞）等大学及び大学人に対する危機感及びそれに対する積極的な提案は枚挙に暇がありません。

これらの意見の中で共通して言える事は、大学の現在の制度そのもの、特に講座制に対する内外の批判であります。現在の講座制が西欧、特にドイツに範を求め、戦後米国の大学院制度を接ぎ木するといった安易な方法が取られたとの意見（読売新聞）は先ず理解出来ますが、「閉鎖的且つ封建的な」講座制度が諸悪の根源であり、この改革なくしては予算の増額（昭和55年より不変）など全くの無駄であり、教授の大多数が専ら自分の大学の出身者で占められている現在のエリート大学に「独創性と研究の活性化」は望み得べくもないとの意見（NS 東海大学教授）は少々極論ではないかという気が致します。先ず何はともあれ「予算の増額」をして戴きたいと言うのが本音ではないでしょうか。しかしながら、本家のドイツでは高野先生のゲッテンゲン便り（本紙連載中）

にもあるように、教授選考基準は勿論大学の制度そのものが本質的に変貌してきている（朝日新聞）事も事実で、日本でも再考の時期にきている事は否めない現実かもしれません。

日本の小・中学校は世界一のレベルにあるが、大学は三流、中でも人文社会系の大学は「レジャーランド」と言い切る読売の社説は極論としても、日本の大学や大学院に我が国の会社企業が見切りをつけ、むしろ外国の大学と共同研究を行う傾向が最近増えているとの日本経済新聞の報道には驚かされると共に、単に「国際化」では片付けられないものがあります。その背景には文部省の科学研究補助金が総額約590億円にしか過ぎず、半数の研究者が5年に1回しか交付されず、全く交付されない人が33%もいる（読売新聞）現実があります。政府が湾岸危機で何千億という金を即座に無条件で供出、また米国に言われて向こう10年間に400兆の公共投資を約束した事実と対比して考えると、単純比較は問題があるとは言え、タメイキが出るのは私だけでないような気が致します。

メーカーの研究所の一人当りの研究費は大学の3倍だそうであります（読売新聞）。勢い、優秀な研究者は企業に流れ、正に「これでは大学が枯れてしまう」であります。しかし、企業だけに研究をまかせて十分でしょうか。企業は当然営利を目的としており、長くても2、3年先には花を咲かせ、実を結ぶ研究を優先させる事は明らかで、それこそ欧米からの「基礎研究只乗り論」に拍車をかける結果となりましょう。将来日本発展の為に大学定員、取り分け支援スタッフの増加と研究費の増額は焦眉の急であります。残念ながら、現在の大学、大学院で大きな成果を発揮出来るのは天才、もしくはスーパーマンだけであり、そのようなシステムは我が国の科学を発展させる道ではないとの提言（日経メディカル）には素直に耳を傾ける必要があります。将来の為に投資出来るだけの「経済力」が少なくとも今の日本にはあるのですから。

今の日本は「金余り」と言われております。我々にとっても外国の方々にとっても不快な言葉であります。直ぐに外国における土地や絵画の投機的売買が連想され、やり切れない思いであります。ところが、この日本にあって今だに大学の教官には当然支出すべき学会出張旅費も出ないことが多くあります。また、教官たるものの待遇も少なくともその子弟を他都市の大学で学ばせること

に著しい負担を感じさせない程度であってしかるべきという川村氏（三菱化成生命科学研究所）の提言は現実の裏返しであり、教授でさえお気の毒としか言いようのない待遇を甘んじて受けていられるのが現状であります。

出生率の低下と老人人口の増加に伴う支出増加一つを

考えても現在の繁栄が長続きするとは思えません。決断するのは今で、今後数年間は大学が「試練の時代」（読売新聞）を迎える事は最早避けられないでありましょう。私のような楽観論者にも頭の痛いところがあります。

（編集副委員長 稲葉憲之）

1日1回投与可能な抗不安薬

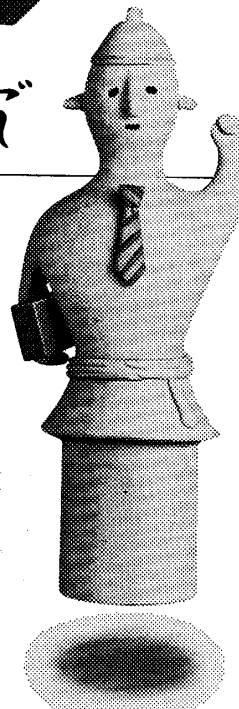
MEILAXで

リラックス

メイラックスは  
特に不安・抑うつ・睡眠障害  
に対して有効な  
ベンゾジアゼピン系薬剤です

特 性

- 1 1日1回投与が可能です
- 2 抗不安作用と運動系機能抑制作用の分離性に優れています
- 3 神経症に確かな効果を発揮します
- 4 自律神経失調症など各種心身症における多彩な愁訴を早期に改善します
- 5 副作用が少なく使いやすい抗不安薬です



効能・効果

- 神経症における不安・緊張・抑うつ・睡眠障害
- 心身症（胃・十二指腸潰瘍、慢性胃炎、過敏性腸症候群、自律神経失調症）における不安・緊張・抑うつ・睡眠障害

用法・用量

通常、成人には、ロフラゼパ酸エチルとして2mgを1日1~2回に分経口投与する。なお、年齢、症状に応じて適宜増減する。

使用上の注意

1. 次の患者には投与しないこと
  - (1)急性狭隅角緑内障のある患者
  - (2)重症筋無力症のある患者
2. 次の患者には慎重に投与すること
  - (1)心障害、肝障害、腎障害のある患者
  - (2)脳に器質的障害のある患者（作用が強くあらわれる）
  - (3)乳児・幼児・小児
  - (4)高齢者（運動失調が起り易い）
  - (5)衰弱患者
3. 副作用
  - (1)依存性  
大量連用により、まれに薬物依存を生じることがあるので、観察を十分に行い、用量をこえないよう慎重に投与すること。また、大量投与又は連用中における投与量の急激な減少ないし投与の中止により、まれに痙攣発作、ときにせん妄、振戦、不眠、不安、幻覚、妄想等の禁断症状があらわれることがあるので、投与を中止する場合には徐々に減量するなど慎重に行うこと。

\*その他の使用上の注意などの詳細は、添付文書をご覧ください。

（資料請求先）

製造販売元



明治製薬株式会社

104 東京都中央区京橋2-4-16

TEL: 03 (272) 6511

技術導入・販売提携

明治サノフィ薬品株式会社

103 東京都中央区日本橋富沢町7-13

新発売  
健康適用

持続性心身安定剤

MEILAX錠 1mg  
2mg

MEILAX-Tablets

ロフラゼパ酸エチル